あそびの研究(5)

モンゴルの子どもたちの遊び

藤本　浩之輔

一、モンゴルの社会的状況

モンゴル人民共和国と親しい関係をもっている大阪外国語大学のモンゴル語の先生や留学生たちの援助によって、私は、一九九一年の七月六日から三十日まで、モンゴルの子どもたちの遊び文化の調査をおこなった。

ソ連のペレストロイカの影響によって、モンゴルでも一九八九年十月ペレストロイカが起こり、私の訪問時は、政治的、文化的混乱の中にあった。

政治面では、人民革命党の独裁から多数政党制の政治へと移り、ソ連の影響力の排除、モンゴルの主体性確立が目ざされていた。英雄チンギス・ハーンに対することさらの顕彰は、その象徴的表現であろう。

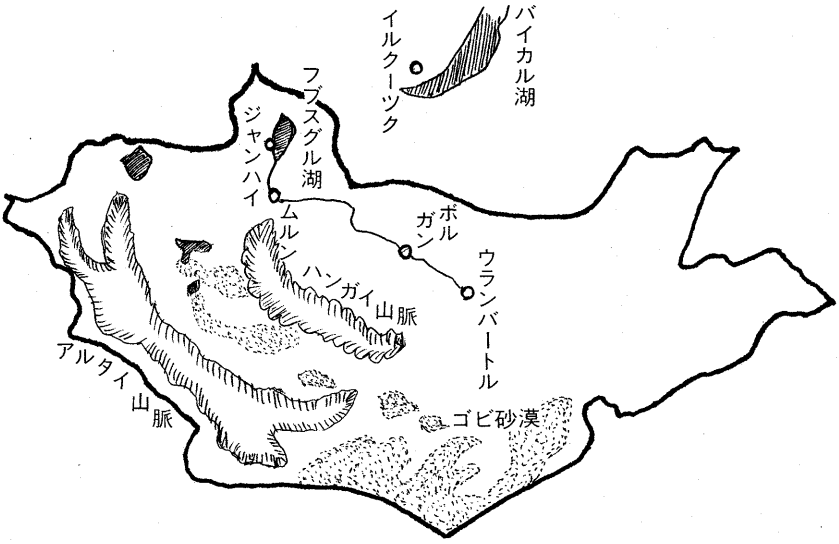
経済的混乱は直接体験することができた。出発準備中の交換レートは一ドル＝十七トゥグルクであったが、行ってみると一ドル＝四〇トゥグルク、九月には一ドル＝一〇〇トゥグルクと変化した。滞在中、一ドルの闇値は一二〇～一三〇トゥグルクという噂であった。銀行もドル不足で、トゥグルクのドルへの交換はできなかった。

重要食品の米、小麦粉、肉、バター、砂糖、茶、酒、

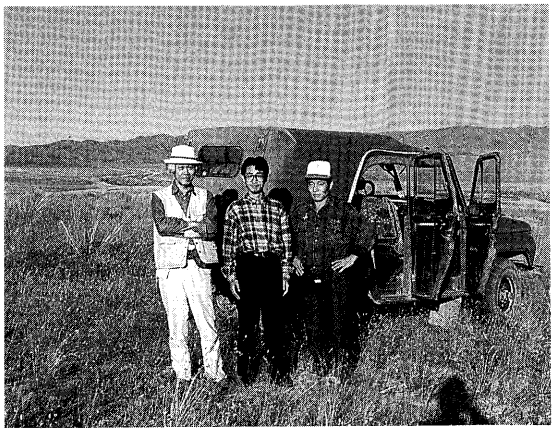
そして石けんや洗剤は配給制であった。したがって、普段の市場にはまったく品物がなく、時々、あちらの市場に野菜が入荷した、こちらの市場に肉が入荷したといって長蛇の行列ができる有様であった。あの牧畜国で、朝、牛乳を買うのに長い列ができるという状態なのである。

革命後、キリール文字が採用されていたが、ペレストロイカ後は伝統的なモンゴル文字の復活が唱導され、あちこちにモンゴル語の看板が立っていた。弾圧・廃止されていたラマ教寺院の再建が始まっており、ハンドマー（女性ラマ）による女性僧院の仮小屋もみられた。

そのような混乱と困窮の中にありながら、首都ウランバートルでも、デモや市民運動がおこるでなく、騒ぎが発生するのでなく、平然と落ちついている。モンゴル通の日本人の説明によると、ウランバートルの住民五〇万人（全人口の四分の一）の多くが農村に根をもっているので、食料品類を手に入れる手段をもっているらしいということ、それに長い権力支配の中でお上にたてつかないという姿勢が身についていることなどが合わさって、



▲モンゴル人民共和国（日本の約4倍の面積）



▲モンゴルの草原にて。向かって左から小生、大阪外大生（通訳）、モンゴル人運転手

そのうち何とかなるさと構えているのだという。

ところで、ウランバートルから出て調査をしようと思えば、車という交通手段が必要である。ソ連製のぼろジープはあるが、ガソリンは配給制のため市販されていない。配給を受けている人から切符を買い集めたり、ウイスキーと交換したりしてなんとか入手した。

調査行程は、図に示したように、ウランバートル↓ボルガン↓ムルン↓ジャンハイ（フブスグル湖畔の保養地）まで七八〇キロ以上に達した。

二、モンゴルの子どもたち

私がモンゴルに入った時は夏休みにはいっており、学校の中の子どもたちをみることはできなかった。しかし、外大の学生T君が、ウランバートルの第二十三番中学校で日本語の講師をしており、その学校の様子をきくことができた。

第二十三番中学校は、小学校課程四年、中学校課程四年、高等学校課程二年の十年制の学校で、市内のインテリ層の子女が入学するハイグレードの学校である。六年生以上の授業が午前八時から十二時まで、五年生以下の授業は午後一時から五時までの二部制になっており、夜は市内の団体の講座などに使用されている。

この学校は、一年生から外国語をとり入れているが、一九八九年まではほとんどロシア語であった。一九九〇

年から、日本語、中国語、英語、ロシア語の四クラスを設置し、それぞれ三五名を入学させた。ロシア語の比重は大きく低下したのである。理科の授業などロシア人教師によっておこなわれていたが、これも打ち切りとなった。したがって、それまで三十名程もいたロシア人教師のうち二十名程は帰国、七、八名はロシア人学校へ移転、二名だけがロシア語講師として残るだけとなった。

▲シャルガモリットの夏期幼稚園

ウランバートル郊外のシャルガモリット（バス運転手組合の夏期保養所）で開かれている第五十四番幼稚園を訪れる機会もあった。本来はウランバートル市内にある宿泊制幼稚園であるが、夏休みなので、この保養地で幼稚園を開設しているというわけである。この幼稚園は、子どもを月曜日ないし火曜日に受け入れ、土曜日の午後二時まで、二十四時間制の保育をおこなっていた。

教育目標は、①自然と親しむ、②身近な社会と親しむ、③文学と親しむ、の三つであるが、保養地では、自然と親しむことと健康を増進することに力点をおいている。例えば、近くの森の中を散歩して、植物や昆虫や小動物を観察したり、草花を見たり、季節の変化と動植物の関わりを考えたりする。そして、乳製品をよく食べ、運動をし、健康の増進をはかるというわけである。

市内では二八〇人を収容しているが、夏休み中はお母

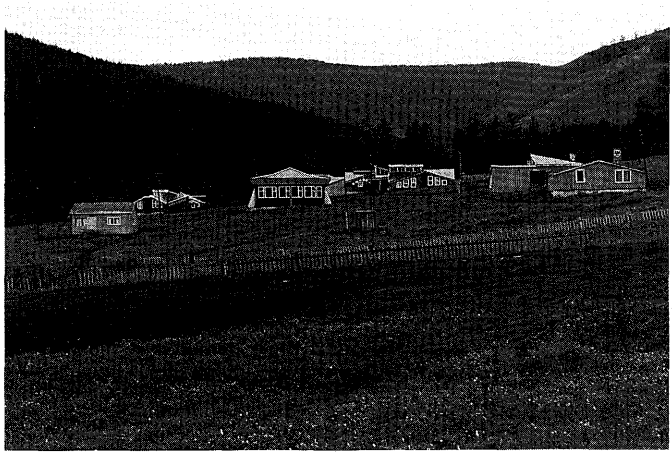
さんの職業組合の保養地に行く子もいるし、田舎に行く子もいるので、ここでの保育は一〇〇名程度だということであった。

シャルガモリットは、なだらかな谷間に広がる草原で、その真中をきれいな小川が自然のままに流れている。ゆるやかな斜面は林である。その自然の中に各家族がセカンドハウス（小屋）を建て、その一角に幼稚園もある。緑の草原で、人々は牛や羊と共にのんびりと寝そべり、太陽の光を楽しんでいるという風であった。

ボルガンでは「子どもの保養所」を訪問した。従来、ピオネールの夏営地という名称であったが、一九九〇年から名称変更がおこなわれたそうである。

ここも、美しい谷間の林と草原の中に施設がつくられており、その真中の低い所を清流が流れていた。収容人数は二八〇名。一回の受け入れは十四日間で、夏休み中六回の交代がおこなわれる。一、二回は五年生以下の子どもたち、三回～六回は六年生以上の子どもたちで、私たちが訪問した日は三回目の最後の日だったようだ。ホールでは別れのダンスがおこなわれており、中に十名程のロシアの子どもたちが混じっていた。ボルガンはロシアに近い所にあり、毎年、イルクーツク市と十名程度の交換交流をしているということであった。

▼ボルガンの「子どもの保養所」



スポーツ委員会の説明によると、この保養所の教育目標は、①自然の中でゆっくり休養すること、②乳製品をたくさんとり、健康の増進をはかること、③各地から集まってくる子どもたちと交流し、体験を交換し、社会性を養うことで、指導には学校の先生や学生たちが当たっていた。

▲牧民の男の子――遊牧の手伝い
家畜の水のみ場にヒツジとヤギの群れを連れてきたところ

費用は、国からの補助があるので非常に安く、十四日間の個人負担は五四トゥグルク（日本円で一八九円）である。

ジープで旅行していると、所々で牧民のゲル（中国でいうパオ）をみることがある。学校がある間は寮にはいっていた子どもたちも、夏休みなので、父母のゲルに帰って生活をしていた。牧民の子どもたちはよく働く。男の子は、牛や羊の放牧やその他の家畜の世話が中心であり、女の子は母親の仕事を手伝って、食事つくり、乳しぼり、乳製品づくり、毛皮製品づくりなどをする。幼児が、バケツをもって、燃料にする家畜の糞集めをしている姿もみることがあった。

三、子どもの遊び

モンゴルでも、日本の子どもたちの遊び文化三十二種類の調査をした。モンゴルのどこに行ってもあった遊び

は、お手玉（シャガイ）石けり、あやとり、おはじき（シャガイ）、ままごと、人形ごっこ、手合わせ、ごむとび、かごめ（類似のサークルゲーム）、花いちもんめ（類似のラインゲーム）、ごむ風船（かつては牛のぼうこうを使うこともあった）、じゃんけん（グー、チョキ、パーはない）、おにごっこ、かくれんぼ、ぶらんこ、すもう、輪まわし、けん玉（ロシア風のもの）、つなひき、くぎたて、ぱちんこなど二十一種類。

どこに行っても無かった遊びは、ヨーヨー、びー玉、馬とび、鹿あそび（胴馬）など四種類であった。

次に、モンゴルの子どもたちの特徴的な遊びをいくつか紹介しよう。

シャガイ・シューレヘ（お手玉）

シャガイとは羊の後足のかかと部分にある小石状の骨（距骨）のことで、モンゴルにはこのシャガイを使うゲームは数多くある。まず、シャガイ・シューレヘというゲームだが、これは多数のシャガイを床にまき、鎖の小片（昔の鎖よろいの一きれを使うとも言う）を上にあげ、下のシャガイをいくつかつかんで、落ちてくる鎖を受ける。鎖が受けられなければ、もちろん失敗であるが、つかまないシャガイにふれるというのも失敗とみなされる。くり返しおこなって、多数のシャガイをとった者が勝ちとなる。

直訳すると「シャガイつかみ」であるが、これは日本の石なご（石お手玉）と同系列の遊びで、骨のお手玉である。モンゴルではいつ頃からおこなわれ始めたか不明であるが、アナトリア地方（トルコ）では、紀元前一千年頃すでにおこなわれていたという記録（レリーフ）がある。日本で、石なごの名称が文献に出てくるのは平安時代になってからであるから、それより千二百年程も後のことである。

シャガイ・ニャスラッハ（おはじき）

シャガイは、床にまくと四面が出る可能性があり、それぞれの面の形状によって、ヤギ、ヒツジ、ラクダ、ウマの名称が与えられている。多数のシャガイを床にまいて、同じ面が出ているものだけを日本のおはじきの要領

ではじいてとっていく。はじかれたシャガイをとる時、他のものにふれてはならない。最後に残った四つをまいて四つの動物が出た場合、早く見つけたものが全部をとることができる。

モリ・オラルダッハ（馬の競争）

シャガイのウマの面を一列に並べる。出発点に各自のシャガイを置き、五つのシャガイをサイコロの要領で振り、ウマの面が出た数だけ自分のシャガイ（駒）をすすめる。早くゴールに達した者が勝ち。日本の回り将棋に類似のゲームである。

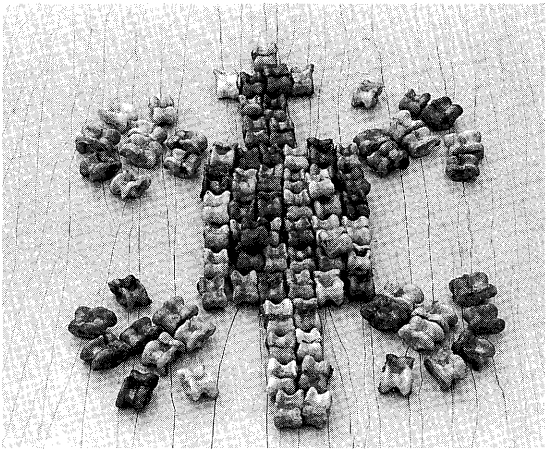
アラッグ・メルヒー（まだらの蛙）

下の写真のように、シャガイを並べて蛙の形をつくる。サイコロを振って、その目の数だけとっていく。多数とった者が勝ちとなる。蛙の形をこしらえたり、数をかぞえたりするので、大人たちが幼児と好んでする遊びである。

ナイザー・オロフ（友だち見つけ）

調査によって、伝承遊びが意外に国際的であることを

▼アラッグ・メルヒー、シャガイを並べて蛙の形をつくる
（尻尾がある――日常みることがないので尻尾があるのか無いのかよくわかっていないらしい）



知っていたが、それでもなおかつ「かごめ」や「花いちもんめ」は日本独自の遊びであろうと思っていた。ところが、これらにも類似の遊びがあった。

ナイザー・オロフは、二人が輪の中に入り、背中合わせにくっついて両腕を組む。周囲の子どもたちは唄を歌いながらぐるぐると回る。唄の最後に、輪の中の二人は自分の思う方向に顔を向ける。二人の顔の方向が一致すると、友だちが見つかったというわけで、二人のうち先の子どもは外に出、新しく指名された子が中に入って同様な所作をする。

この遊びにはもう一つのパターンがある。一人が輪の中に入り、立ったまま目を閉じ、手を水平にあげて指を差す。周囲の者は次のような唄を歌いながら時計回りにまわる。

アーラー　ジム　ジム
アーラー　イラ　ブスィダ
バカ　ジカ　ノービヤ
イーラス(一)、イッドゥウ(二)、イットゥリ(三)

それと同時に、中の子は反対回りにまわる。唄が終わった時、指を差された子どもが交代して中に入り、同様の所作がおこなわれる。

▼ナイザー・オロフをする子どもたち
ウランバートルの国地にて

アルタン・ギンジ・タスラフ（くさり切り）

この遊びは、日本の「花いちもんめ」に相当する。花いちもんめと同様二つの組にわかれ、向かい合って手をつなぐ。お互いに唄を歌って行きつもどりつする。

A　金のくさりを切ってみろ

B　誰が切る

A　○○さん

指名された子は、相手の組に向かって勢いよく走っていき、つないでいる手（くさり）を切る。切れるとどちらかの一人を連れて帰ることができるが、切れなかったらその子が相手の組にとられる。

この「くさり切り」は、中国奥地のウイグル自治区でもおこなわれていたところをみると、かなり広く分布している遊びのようである。

ボッダク・ゴイフ（えのぐ乞い）

モンゴルのおにごっこにおけるオニは、オオカミである。そして、開始の時にちょっとした問答がおこなわれるというのも特徴的である。遊びの始めに、子どもたちは自分の色をきめる。外からやってきたオオカミが次のように問いかける。

オ　えのぐをくれ

皆　何色ですか

オ　赤色だ（青色でもよい）

赤色ときめている子が出て、オオカミの掌を打ちながら数をかぞえる。一〇、二〇、三〇……一〇〇。九〇まで数えた時、皆は逃げ、オオカミは一〇〇をきいてから追いかける。

チョノ・タルバガ（オオカミとタルバガン）

モンゴル草原を旅していると、ウサギのような動物が巣穴のへりに二本足で立って、好奇の目でみているのによく出会う。これは、タルバガンというマーモットの一種で、地中に穴を掘って住んでいる。オオカミのよい餌じきにされる動物である。オニであるオオカミとタルバガンの間で問答がおこなわれ、おにごっこが開始される。

タ　オオカミさん、オオカミさん、火をください
オ　火を使って何をするんだ
タ　のりを煮るんだ
オ　のりでどうするんだ
タ　弓矢をつくるんだ
オ　弓矢でどうするんだ
タ　お前の頭を射ぬくんだ

こう言ったとたん、タルバガンは逃げ、オオカミが追いかける。

遊びにおけるタブー

モンゴルの遊びの中には、伝統的にタブーとされてきたものがいくつかあり、それらの遊びは最近になるまであまりおこなわれなかった。

ザブハン県やゴビ県の例でいうと、かつては人形ごっこはタブーであった。その理由は、子どもは未来を予知する能力があり、子どもが希望したことは近く実現すると考えられていたから、子どもが人形ごっこをして人形を欲しがると、子どもが生まれるというわけである。だから、ままごとが延長して人形ごっこになったりするのを、老人たちに見つけられるとよく叱られたものだという。

同様の理由で、お医者さんごっこで病人になると病気になり、戦争ごっこをして死ぬまねなどすると本当に死ぬことになる。したがって、こういった遊びもタブーであった。

昔は、かくれんぼをすると家畜が死ぬと言われていたので、農村ではかくれんぼはタブーであった。都市では家畜を飼わないので、最近はかくれんぼもおこなわれるようになっている。

また、馬とびや鹿遊び（胴馬）のように、前かがみになった人の背に乗る遊びもタブーである。頭は大事なところであるから尊重すべきで、とび越したりしてはいけないとされているのである。したがって、他人の帽子をかぶったりすることもよくないとみなされている。

（京都大学教育学部）

＊このシリーズは、今回で終了いたします（編集部）